



宮城県におけるクロサギ *Egretta sacra* の繁殖初記録

佐藤賢二^{1,*}・鈴木卓也²

1. 株式会社エコリス 〒981-1104 宮城県仙台市太白区中田5丁目3-21

2. 南三陸ネイチャーセンター友の会 〒986-0729 宮城県本吉郡南三陸町志津川字天王山205番地12

はじめに

クロサギ *Egretta sacra* は、東アジア、東南アジア、オーストラリア、ミクロネシアに分布し、日本では留鳥として本州以南に分布し、太平洋側では房総半島以西、日本海側では男鹿半島以南で局地的に繁殖し、東北地方以北では夏鳥で、北海道では迷鳥（真木ほか 2014 年）とされている。「日本鳥類目録 改訂第 7 版」日本鳥学会 (2012) によると、本州におけるクロサギの分布は、留鳥として繁殖 (RV)、茨城県のみ一時的繁殖 (CV) とされているが、桐原ら (2009) では、太平洋側では房総半島以西、日本海側では男鹿半島以西で繁殖とされている。しかしながら、東北地方では各県で断片的に観察記録が知られているものの、特に近年の生息状況が整理された資料が少ないことから、各地域における観察情報の聞き取りを行った。たとえば、秋田県における 2019 年の繁殖状況は、象潟町では繁殖しているが、男鹿半島では生息が確認されているものの繁殖は確認されていない（足利直哉 私信）。山形県では、庄内地域の海岸に周年生息しており繁殖していることは確実と考えられているものの、2019 年の時点では繁殖は確認されていない（築川堅治 私信）。青森県では、1970 年代から 1980 年代にかけて中泊町や深浦町などで生息が確認されており繁殖の可能性もあったが、確認には至っていない。近年は観察例もわずかとなっている（小山信行 私

信）。太平洋側では、福島県ではいわき市豊間から勿来周辺において、2018 年まで生息が確認されているが、繁殖は確認されていない（吉田正明 私信）。岩手県では盛岡市や大船渡市などで数例の観察記録があるのみである（関川實 私信）。宮城県では、田中 (1982) によると、「南三陸では繁殖しないものと思われる」とされており、宮城県 (1994) では迷鳥とされ、日本野鳥の会宮城県支部 (2002) では「県内では不定期に情報がある。ほぼ周年観察されているが個体数は少ない」とされているが、確実な繁殖記録はない。このように、東北地域における確実な繁殖事例は少ない。また、仙台市蒲生干潟周辺では夏季にクロサギの観察記録があり、その多くは白色型である。しかし、蒲生干潟周辺のクロサギ白色型とされる鳥の写真は、筆者が確認出来た限りではいずれもコサギ *E. garzetta* の幼鳥かカラシラサギ *E. eulophotes* が誤認されたものであり、クロサギと確認できるものはなかった。宮城県内におけるクロサギ白色型の記録については今後再検討の必要がある。

筆者らは、宮城県牡鹿半島南端付近の島嶼である砥面島においてクロサギの繁殖を確認した。この記録は、宮城県のみならず東北地方の太平洋側では初めての確認であり、太平洋側では国内最北の繁殖記録となることから、ここに報告する。

2023 年 1 月 9 日 受理

キーワード：クロサギ、繁殖、宮城、南三陸

*: zunorigamo.sk@gmail.com

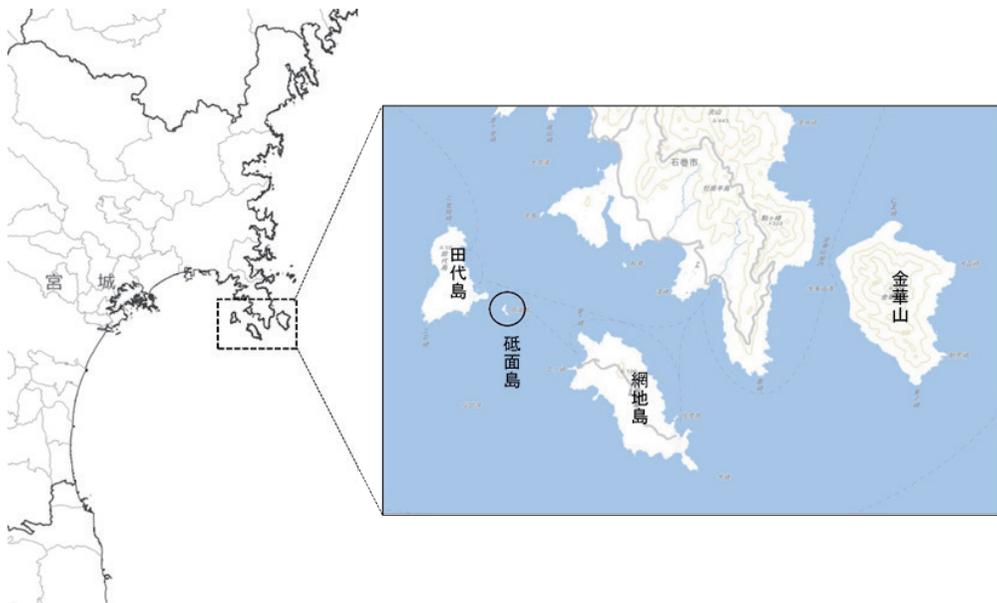


図 1. 調査地. 網地島, 田代島, 砥面島の 3 つの島にある崖を小型船から観察した。
 Fig. 1. Study sites. Cliffs on three islands, Aji-Shima, Tashiro-jima Island and Totsura-jima were observed from small a boat.

調査方法

繁殖確認のきっかけとなったのは、2016 年 9 月 30 日に別件調査のため宮城県の金華山及び網地島周辺の島嶼を船で廻った際、網地島、田代島、砥面島の 3 島において、少なくとも 8 羽のクロサギを観察したことである。それまでの宮城県では 1～2 羽が時折飛来する程度と考えられていたが、当地域においてある程度の個体数が生息していることが示唆された。

そこで、2016 年に生息が確認されなかった金華山を除く網地島、田代島、砥面島の 3 島 (図 1) においてクロサギを対象とした調査を行った。調査日時は、2017 年 7 月 15 日、2019 年 6 月 19 日、7 月 3 日、7 月 21 日の 4 回、主に 10:00 から 13:30 頃の時間に行った。なお、2019 年 7 月 3 日と 7 月 21 日はクロサギの繁殖兆候があった砥面島のみで観察を行った。

調査対象とした網地島及び田代島、砥面島は、南三陸地域の南端に位置し、網地島及び田代島は有人、砥面島は無人島である。寒暖の差が少なく、厳冬期でも気温が 0℃を下回らない。暖流黒潮の影響によりタブノキ *Machilus thunbergia* やヒサカキ *Eurya japonica* などの常緑樹やアイアスカイノデ *Polystichum longifrons* などの暖帯性植物が数多く認められているほか、寒流親潮の影響もあり、シャジクソウ *Trifolium lupinaster* などの寒冷地植物も見られる。クロサギの他にもウミウ *Phalacrocorax capillatus*、ウミネコ *Larus crassirostris*、オオセグロカモメ *L. schistisagus* が繁殖していた。いずれの島も周囲が急峻な崖地に囲まれており、クロサギの営巣地が想定される海岸に面した崖地を陸からの観察することが困難だったことから、各島の周囲 (岸から 50～150m 程の距離)

を小船で航行し、8倍～10倍の双眼鏡を用いて、クロサギの個体や岩棚を観察し巣の有無を探索した。航行速度は、各島の地形（水面上からでは視認しづらい岩礁が入り組んでいる場所はゆっくりと見るなど）や、波の強さによって調節した。また、岩棚が多い箇所では、10分～30分程度、一定の位置に留まって観察を行った。なお、本報告における地図は国土地理院地図を使用した。

結果及び考察

調査対象とした3島のうち、砥面島においてクロサギの繁殖を確認し、調査期間を通して古巣を含めた3巣を確認した(図4)。

2017年7月15日、砥面島において成鳥2羽と幼鳥1羽のクロサギを観察した。幼鳥と判断した根拠は頭部に綿羽が残っていたことに加え、冠羽や背面の飾羽が無く、肩羽及び雨覆の羽縁に褐色味があった。これらの特徴は、黒田(1980)の「非生殖羽および幼鳥は飾羽を欠く」とあることと、真木ら(2014)の「幼鳥は冠羽がなく、あっても短い」、水谷・叶内(2017)の「幼鳥の羽には褐色味がある」という特徴と一致していた。その他、胸から腹部が背面よりも淡色であった点も成鳥と異なっていた。また、この個体は20～30m程度の範囲を常に歩いて移動しており、観察時にはまだ飛翔力が備わっていない様子であった。

幼鳥の活動範囲内において、南向きの断崖に這うように生えたミヤマビャクシン *Juniperus chinensis* var. *sargentii* の幹上に小枝で組まれた巣(以後巣B)を確認した。その周辺には多量の糞が付着しており、幼鳥もこの巣を中心に活動していたことから、2017年にクロサギが繁殖に利用した巣と考えられる。また、同岩場の北向き断崖にある岩棚にも当該年には利用している形跡がない巣(以後巣A)があった。巣

Aは断崖の岩の隙間にできた棚に小枝が組まれた皿型に造られていた。本地域で断崖の岩の隙間を利用して繁殖する種はハヤブサがあるが、ハヤブサは巣材を使用しない。また、内田(2019)によると、クロサギの巣は「岩の陰や樹上に、枯れ枝や枯れ草を使って浅い皿型の巣をつくる」とされており、この特徴とも合致することから、巣A、巣Bはクロサギの巣と考えられた。

2019年6月19日に2017年に巣と幼鳥が確認された同じ岩場の尾根上にあるミヤマビャクシンの根元(2017年の巣A Bとは別の場所)でクロサギ成鳥を確認した。クロサギがいた位置には重ねられた小枝が見られた(巣Cとする)。クロサギは、岩場の近くに船が近づくとその場から離れ、船が離れると元の位置に戻って座る行動を繰り返したことから、クロサギが座っている位置が巣と考えられた。巣には糞の付着はなく、雛の姿や給餌をするような仕草が無かったことから、抱卵中と推察された。なお、2017年に確認した2巣と同じ場所には、いずれも巣材が残っていたものの、利用形跡は見られなかった。

2019年7月3日に巣内にいる成鳥を確認し、巣C付近には糞の付着が見られたものの、雛の姿は確認できなかった。網地島方面より別の成鳥が飛来して巣に入ると、先に巣内にいた個体が巣から出て網地島方面へ飛び去った。この際巣に入った成鳥は給餌を行う様子もなく巣内に座り、そのまま調査終了時まで座り続けた。

2019年7月21日に巣内に座る成鳥を確認した。成鳥が立ち上がった際、綿羽に覆われた2羽の雛を確認した(図3)。その後網地島方面より飛来した別の成鳥からの給餌があり、給餌をした成鳥はそのまま調査終了時まで巣に留まっていた。なお、交代して巣から出た個体は、北東の本土方向へ飛び去った。



図2. クロサギの幼鳥（2017年7月15日）
Fig. 2. A fledgling on July 15 2017.



図3. 巢内の成鳥と雛（2019年7月21日）
Fig. 3. An adult and a chick in the nest on July 21, 2019.

今回繁殖を確認したクロサギは、2017年と2019年で異なる巣で営巣したことに加え、2017年の初確認時には既に古巣が存在していたことから、毎年巣を変えている可能性があり、少なくとも2016年以前より繁殖していたと考えられる。

宮城県におけるクロサギは、以前より南三陸地域、特に網地島周辺で観察記録があった（例として日本野鳥の会宮城県支部2002）ものの、その多くは冬季の記録である。その理由として、クロサギの記録が多い網地島は、海鳥観察に適

した探鳥地と知られており、冬季にはバードウォッチャーが訪れるが、夏季には少ないことや、クロサギの生息環境となる岩礁地を見通すことができる位置が限られているため人目に触れる機会が少なかったと考えられる。今回、船上からの観察によりクロサギは夏季にも生息し、繁殖していることも確認できたことから、クロサギは南三陸地域には留鳥として生息していると考えられる。

ただし、今回調査を行ったのは、金華山を含め4つの島嶼にすぎず、繁殖を確認できたのも

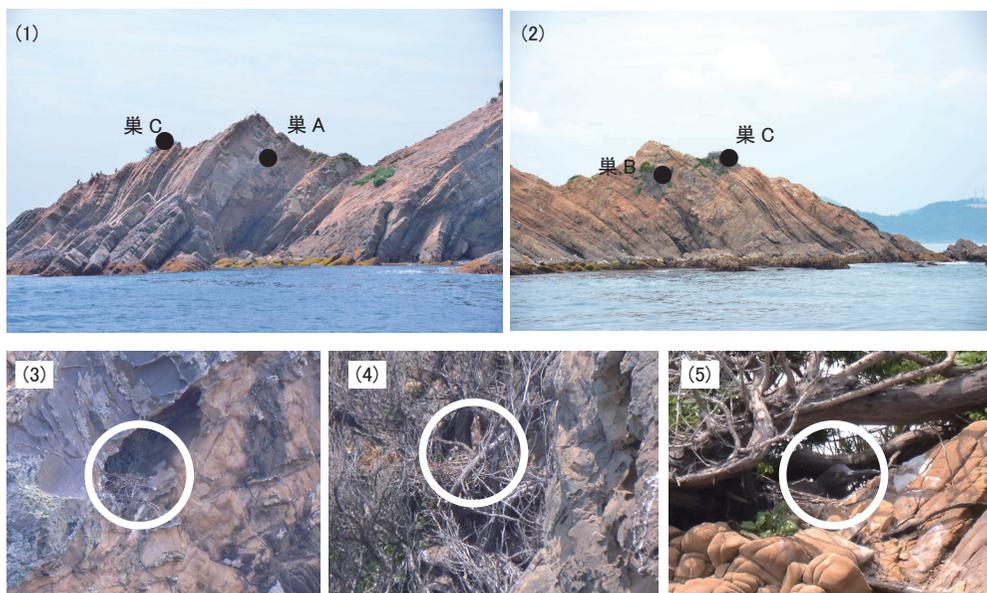


図4. クロサギの営巣位置。(1) 北側斜面。(2) 南側斜面。(3) 岩棚に造られた巣A。(4) 崖に生えた木の幹の上に造られた巣B。(5) 尾根の地上に造られた巣C

Fig.4. Positions of the nests of the Pacific Reef Heron. (1): North side slope. (2): South side slope. (3): Nest A on the cliff ledge. (4): Nest B built on a shrub on the cliff, (5): Nest C built on the ground of the ridge.

一つがいのみである。また、牡鹿半島の付け根付近の沖合に位置する女川町江島列島では、幾度かの調査を試みているがクロサギは確認されていない(佐藤賢二 私信)。また、牡鹿半島全域や半島西側の海岸線などの本土側では調査を行っていないことから、南三陸一帯におけるクロサギの分布や生息数、さらには繁殖が一時的なものか継続して行われているかは判っておらず、これらを明らかにするためには南三陸海岸の広域で調査を行う必要がある。

謝辞

本調査を行うにあたり、協力していただいた阿部豊道船頭、並びに貴重な情報の提供や助言をいただいた足利直哉氏、小山信行氏、小室智之氏、関川實

氏、竹丸勝朗氏、築川堅治氏、故吉田正明氏に感謝を申し上げます。

引用文献

- 青森県レッドデータブック改訂検討会, 青森県環境生活部自然保護課. 2020. 青森県の希少な野生生物—青森県レッドデータブック(2020年版). p.201,青森.
- 秋田県生活環境部自然保護課. 2016. 秋田県の絶滅のおそれのある野生生物—秋田県版レッドデータブック2016—動物I[鳥類・爬虫類・両生類・淡水魚類・陸産貝類]. p.25, 秋田.
- 茨城県生活環境部環境政策課. 2016. 茨城における絶滅のおそれのある野生生物 動物編 2016年改訂版(茨城県版レッドデータブック). p.53, 茨城.
- 内田博. 2019. 日本産鳥の巣と卵. 46頁. まつやま書

- 房, 埼玉.
- 桐原政志・山形則男・吉野俊幸. 2009. 日本の鳥 550 水辺の鳥 増補改訂版. p.93. 文一総合出版, 東京.
- 黒田長禮. 1980. 新版鳥類原色大図説Ⅱ. p.98. 講談社, 東京.
- 財団法人日本野鳥の会青森県支部/弘前支部. 2001. 青森の野鳥. p.45. 東奥日報社, 青森.
- 財団法人日本野鳥の会秋田県支部. 2009. 秋田県鳥類目録. p.4, 秋田.
- 財団法人日本野鳥の会いわき支部. 2015. いわき鳥類目録2015. p.51, 福島.
- 財団法人日本野鳥の会宮城県支部. 2002. 宮城県の鳥類分布. p.34,p.300, 宮城.
- 財団法人日本野鳥の会山形県支部. 2011. やまがた野鳥図鑑. p.14, 山形新聞社, 山形.
- 田中完一. 1982. 野鳥は空に花は野に—南三陸野鳥観察—. p.61, 宮城.
- 中村登流・中村雅彦. 1995. 原色日本野鳥生態図鑑—水鳥編. p.134. 保育社, 大阪.
- 日本鳥学会. 2012. 日本鳥類目録改訂第7版. p.86. 日本鳥学会, 三田.
- 真木宏造・大西敏一・五百澤日丸. 2014. 決定版日本の野鳥650. p.174. 平凡社, 東京.
- 水谷高英・叶内拓哉. 2017. フィールド図鑑 日本の野鳥. pp.106-107. 文一総合出版, 東京.
- 高橋和吉. 1972. 宮城県網地島植物誌—島民の生活と植物—. pp.47-128, 宮城.
- 宮城県. 1994. みやぎの風にのって—第48回愛鳥週間「全国野鳥保護のつどい」記念誌 [宮城の鳥たち]. p.163, 宮城.
- 宮城県環境生活部自然保護課. 2016. 宮城県の絶滅のおそれのある野生動植物 RED DATA BOOK MIYAGI 2016. 宮城.
- 山形県. 2019. レッドデータブックやまがた2019 山形県の絶滅のおそれのある野生動物. p.64, 山形.

First breeding record of the Pacific Reef Heron *Egretta sacra* in Miyagi Prefecture, northern Japan

Kenji Sato^{1*} & Takuya Suzuki²

1. Ecoris, Inc. 〒 981-1104 5-3 -21 Nakata, Taihaku-ku, Sendai-shi, Miyagi

2. Friends of the Minamisanriku Nature Center

〒 986-0728 138-11, Tennozsan, Shizugawa, Minamisanriku-cho, Motoyoshi-gun, Miyagi Prefecture.

We confirmed the breeding of Pacific Reef Herons *Egretta sacra* in 2017 and 2019 on Totsura-jima Island, a small island near the southern tip of the Oshika Peninsula, Miyagi Prefecture, northern Japan. We used a boat to observe the birds from the sea. In 2017 we identified young birds after leaving the nest (fledglings), in addition to discovering an old nest estimated to have been built before 2016. In 2019 we observed a nest in the incubation and chick brooding periods. This is the first confirmed record of the breeding of this egret on the Pacific side of the Tohoku region and the northernmost record on the Pacific side of the country.

Keywords: Pacific Reef Heron, breeding, Miyagi, Minami-Sanriku

*: zunorigamo.sk@gmail.com